

平成30年10月1日発行 春燈/第73巻第10号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 October

10月号



主宰の句

安立公彦

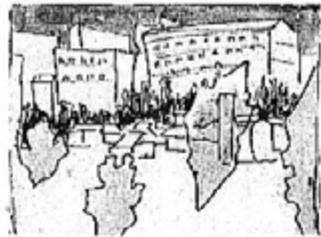
空蟬をつつむしばしの夕日かな

老い様のときに疎まし一夜酒

移りゆく世事を遠見の秋桜

丹精の荔枝ゆらすや秋の風

父ははのいまも在るかに終戦日



成瀬櫻桃子の句

誰もみず芙蓉とだけの午後の刻

『素心』昭和五十六年

淡い紅色の芙蓉の花が明るい日差しを受けて、静かに咲いています。優しく美しく微笑んでいるように。でも明日はしぼんでしまふ花。きつと、先生は純真な美菜子様と二人だけで和やかな午後のひとときを過ごされていたのでしょう。芙蓉がお嬢様と重なり、先生のあたたかい愛があふれているように感じます。誰もみずの上の句は少し淋しくて切ない気持ちに私をしてしまいます。

渡辺若菜

成瀬櫻桃子の句

秋草のどれも頸長夢二の忌

『風色』昭和四十八年

前年にお母様をしくされ、へ母迎ふ門火小さしすゝ消ゆるの
新盆の句が少し前にある。

秋の澄んだ月の光に竹のつややかな緑を濡れたように
浮かび上がらせる。去来忌が良く効いていて、一周忌を
済まされた、さまさまなお心が見えるようだ。

長女美菜子様を、そして故郷を想うお気持。生きてい
ること生かされていることに自ずと感謝したくなる。

西岡啓子

燈下集



○ 西川保子

水槽を天地としたり天使魚
蚊喰鳥生絹のごとき夕空を
丹後の闇ふかし蛍火ちりばめて
漆黒の川面をすべり蛍の火
蛍火のひとつ高みへ敦の忌

○ 佐藤信子

手に囲ふてんたう虫や敦の忌
汐風に散らす切り幣海開き
一碗の茶粥の縁や夏安居
過去帳のけふの仏や葛桜
昼寝覚め昭和平成夢の間に

○ 山内四郎

その中に黄色く咲いて母子草
梅雨の傘ポストにかざし投函す
スーパリーの先づは苺のワンパッケ
この暑さ手にするもので煽ぎけり
昼寝してあの世の人に会ひにけり

○ 片桐てい女

蟻に曳かるる蟬よ舌噛め呼吸を絶て
蟻に曳かるる蟬は骸となれずぬて

白緋の黄ばみの月日父と在り

軒深く吊つて玉葱大中小

西瓜の縦縞すこしのよろけは粹に着よ

○ 石橋 邦子

百日草筑波はいつも雲の中

炎天や田に人影のなくなりぬ

みんなの鳴きつぐ夕べ夕爾の忌

お囃子や一度ゆきたきねぶた祭

七十三年かへらぬ遺骨敗戦日

○ 河本由紀子

滴りも命の水の山路かな

「海行かば」海に鎮もる晩夏かな

薄衣のセニヨリータ秋波送りけり

鵲の橋わたりても逢へぬ人

米櫃を満たし迎ふる敗戦日

○ 永井 恵子

早苗饗も今年で了りと村の長

土付きの茗荷の子三つ掌上に

蘭鑄を育て家業の傾けり

風鈴にほどよき夜風二人の居

人住まぬ隣家の庭や虫浄土

○ 荒井ハルエ

七月や枝伸びやかに大櫓

門川の水音高し敦の忌

水抜かれふんばつてゐる青田かな

足繁く通ふコンビニ親燕

祭笛佃小橋に灯のともり

○ 石田 康明

ふる里の映像辛し大出水

万緑の山河を善くも哭かしたな

戦慄の朱夏四十度越ゆるかな

避難所の幼友達青胡桃

物陰に今は危険と真昼の蚊

○ 宮 崎 洋

何するでなく敦忌の日暮にぬ

香水をまだ知らざりし母の傘

詩のあかつき笛のゆふぐれ夏深し

高鳴れる能管夏を葬りけり

小さき帆の 一列秋へ進むかな

○ 柴崎富子

猫舌に紅茶の熱し秋はじめ

桐一葉アルミの小窓掠めけり

津田塾の友の消息盆の月

いくたびも名を問はれけり生身魂

行く先は夫に委せり星月夜

○ 園部 露 郷

つばくろの巢のある家に結納す

蟬しぐれ一つが家に入りて鳴く

句風ちと変へて満足冷奴

赤き爪赤き唇へとさくらんぼ

朱夏のバー深海魚らが閃光す

○ 松橋利雄

敦忌や雲のうごきの日の弱り

蟻の道丸太の下をくぐりけり

雲の峰駅長切符きりにけり

出酒らしに立つ茶柱や日の盛

夕風や傘寿自祝の冷奴

○ 橘 正義

七月来台風七号伴ひ来

統計上最も早き梅雨明と（関東）

海遠しただ炎天下なる暮し

片蔭を辿りつつ駅目指しけり

暑に耐ふる両耳たぶを引張つて

○ 小林のり人

日露戦祖父の手紙を曝しけり

老い鰥夫客あしらひの裸かな

稲荷さま鳥居の百や蟬時雨

宿題の子の腹這ひや簞

ここだけと言ふ客の大団扇かな

○ 三上程子

七月の忌の日や書棚ととのへむ

蓮揺らし心ゆらすを風といふ

卒塔婆のかたりことりと日の盛

三伏や耳掃除して聞く小言

まくなぎを払ひて次の世を覗く

余言

安立公彦

七月の忌の日や書棚ととのへむ

三上 程子

七月本部句会で特々選に選んだ句。講評を再録する。「七月を忌日とする俳人・文人は、楸邨、鷗外、秋櫻子、龍之介、左千夫（他略）と数え上げると、古人を除いても二十数名居る。その中で、この句の『忌の日』は当然ながら安住敦忌。春燈人なればこそこの句と言えよう。書棚ととのへむに、作者の思いが良く出ている。」

今年も七月八日の敦忌は、皆さんの深い思いの中に過ぎた。昭和六十三年、早三十年の歳月が過ぎていく。

八月や戻ら声の海蒼き

大嶋 洋子

八月十五日は終戦記念日。第二次世界大戦で日本国が、連合国側に無条件降伏した日だ。歳時記は、その日を永遠に忘れず、戦争の根絶と平和を誓い、同時に戦没者を追悼する日として季題の一つに収録している。

この句、「戻らぬ声の」に、作者の深い思いが籠められ

ている。或いは洋上の戦いで逝かれたのか。「海蒼き」は幾万の兵を呑み込んだ太平洋の海原である。「八月や」がそういう思いを、これ以上ない季語として統べている。

うねり来る男の華や荒神輿

尾野奈津子

この句、七月本部句会で特選に選んだ。講評に、「うねり来る荒神輿」を「男の華」と断定した点がみごとだ。東京の、古い下町の風情が良く出ている、と書いた。

東京の祭りを実際に見たのは神田祭だった。はるかな昔のことで、神輿巡幸や、山車など、そのきらびやかな色彩に、しつかりと「江戸」を感じたことなど、今思い出しても、それは一幅の書画となつて記憶の底に残されている。この句、まさに「祭」、それも「日本の祭」の句だ。

老鶯や互替りのこ糸曳きて

諸岡 孝子

「互替り」は、「かたみがはり」（互いに替り合うこと、交互、輪番）、と辞書は記す。「老鶯」は、春過ぎて鳴く鶯、晩鶯、残鶯であり、老いた鶯ではない。へ老鶯や暗るるに早き山の雨 成瀬櫻桃子。

この句、如何にも老鶯である。「互替りのこ糸曳きて」がその有り様を良く表現している。東日本大震災から七年

の歳月が過ぎた。更に今年七月の西日本大豪雨を思うにつけ、この細長い日本列島に、災害の萌芽の生じないことをひたすら祈るばかりだ。この句を見ると、そういうことなどにも思い及ぶ。しかし長閑な作品である。

洗ひ髪乾く間黙禱して足らず

白神知恵子

七月に發生した西日本大豪雨は、近來まれな猛暑と台風、三重の大災害をもたらした。この余燼は今も尚被災地に残存する。同時発表の、〈眺望は泥一色や大出水〉、更に、〈拾ふ神捨てる神振花倒る〉を見ても、災害の直中での悲慘さが生の声として私たちの胸を打つ。ボランティアの皆さんの奉仕にも頭が下がる。

この句、「黙禱して足らず」に、亡くなった被災者への厚い思いが感じられる。復興を祈るばかりだ。

向日葵のみぢんもみせぬ愁ひかな

小倉 陶女

この句も七月本部句会での特選句。講評を再録する。「真夏に咲く向日葵の美しさは、その開放的な色彩と、開花の大きさにある。この句、それを、みぢんもみせぬ愁ひと詠んでいる。向日葵の風姿を詠んだ句は多いが、この句はその心奥を追っている」。

まさにその通り。向日葵を見ると、いつしかその向

日葵が語りかけて来るような気分になる。頭状花と呼ばれる花の特異性か。擬人化した表現が善い。

別れきて電車待つ間の遠火花

松山三千江

火花はまさに夏の夜の風物詩である。打上火花から線香花火と、趣は文字通り天と地の違いはあるが、それぞれに夏の夜を演出するものと言えよう。隅田川火花大会は以前見に行つたが、余りにも多い人波に戸惑うばかりだつた。

この句は「遠火花」。この言葉には詩がある。「別れきて電車待つ間」の、時間の流れが善い。その時間の流れには物語がある。ふと見上げる彼方に、今打上火花が夜空を彩っている。肩の力を抜いて鑑賞出来る句と言えよう。

買物の足止めて聞く祭笛

大文字孝一

この句も前掲の句と同じように、日常の些事を詠んだ句である。然して紛れもなく良質の俳句である。

「買物」は日常の行い。その「足止めて聞く」も何気ない仕種である。そういう作者に、今「祭笛」の音色が聞こえて来たのだ。近くの神社の御輿の渡御が始まったのか。聞き馴れた祭笛は、作者にとつては生活の一面である。この句、「足止めて聞く」という中七が、そういう日常の思いに素早く反応する仕種を、巧みに表現している。

当月集

安立 公彦選



○ 横山さくら

旧友の尽きぬ話や遠花火

踏みしむる草の香深き晩夏かな

新色の紅の赤さや秋隣

寄せ植系の配置入れ替へ秋に入る

目を細め何を確かむ秋暑し

○ 宮崎紗伎

川なりに曲がる家並百日紅

逞しきものみな眩し夏の雲

病む人にこれ見よがしの花葵

点滴を掲げて歩く遠花火

病みぬきし酷暑のあとの雨ひと日

○ 中里よし子

青鷺舞ふ水面涼しき夕べかな

辿り来て草にはりつく夏の蝶

雑草の仄かな吐息晩夏光

あるなしの風に戦く穂草かな

庭石に残る火照りや虫すたく

○ 平沢恵子

開国の港音なく虹立ちぬ下田

視線逸らし金魚ゆるりと時を食む

籐椅子に沈みいつしか母と在り

日にのぼる沼のにほひや土用入

ごきぶりの艶のあはれを打ちにけり

○ 持田信子

迷ひ込む太郎の世界夏館岡本太郎美術館三句

「手の椅子」に座して涼気をもらひけり

夏空へ思慕膨らます母の塔

蓴菜を育て男のしづかなる

じゅんさいの花を日ざしのすべり落つ

春燈の句

安立 公彦選



母の日や白寿頼みの翼負ふ

千葉 池田 葉子

涼しさや撒きたる程の岬の灯

九十年の脂抜けゆく溽暑かな

猛暑なる地球老いしと思ひけり

大時計徐に鳴る涼しさよ

大阪 中上 馥子

急行の停まらぬ駅の大夕焼

ブーメラン夏台風の迷走す

半世紀住みし家を捨つ文月尽

凌霄の花を目当てに友を訪ふ

東京 池田 節

一瞬の日照雨に日傘濡らしけり

年古れど変はらぬ黒髪洗ひけり

白百合の香の立つ庭となりけり

小流れに浮かす笹舟藍浴衣

東京 佐俣まさを

畦道に憩ふ日課や瓜の花

忘れ潮に映るしら雲夏の果

迎火やつと空仰ぐ母の癖

夏瘦せて父祖の血筋を継ぎしかな

先人の名句ひもとく夜の秋

思ひ知らざる自然の脅威夏ゆかず

幼少の記憶よみがへる八月来

腕白のしかと日焼の正座かな

ただひとりねころるぶまや夏座敷

水盤や水石沖の烏帽子岩

若女将御湿りほどの水打てり

二百戸のひしめく浦の薄暑かな

青蘆の間に漁舟かへる

睡蓮の花大池の静けさに

老鶯や風のひそむる遺跡谷

神奈川 山下 健治

東京 小林 文良

島根 土江 比露